

國學院大學學術情報リポジトリ

タルススのパウロと宗教的な革命をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: バイヨ, ジャン, ラクビビエ, ポール ド メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001598

タルススのパウロと宗教的な革命をめぐる¹

ジャン・バイヨ著

ポール・ド・ラクビビエ訳

前書き

ジャン・バイヨ神父（1921-2015）は、人文科学に精通し、すべてのギリシア・ローマ古典に精通している学者の一人である。長年、パリの名門コレージュ・スタニスラスで古代言語（ラテン語とギリシャ語）を教えていた。また、1980年代に聖ピオ十世学院が設立されてから1990年代末まで、同じ古代言語を学生向けに教えていた²。

本日は、30年以上前の、しかし今日でも通用する講演を邦訳して公開する。この講演では、奴隷制度に関する2つの有名な書簡が紹介されている。ローマ人の高度な自然文明がどこまで進んでいたのか、そしてカトリックの信仰が、奴隷制度を否定することなく、いかにしてその精神を変え、西洋の地から奴隷制度を消滅させたのかが説明されている。ローマ法の歴史家、奴隷制の研究者、キリスト教の専門家にとって興味深いテーマである。

なぜバイヨ神父の講演を日本語に訳すのか？ 理由はいくつかある。

第一に、『法政論叢』（令和5年）のミシェル・ルーシュの翻訳と同様、私がいいたかった大先生に敬意を表したいからである。ギリシャ・ローマの古典を精通しおり、ラテン語を読みこなし、カトリックの典礼にもラテン語を用いるなど、幅広い教養を持ち、古典的な人文学者であった。このような偉人は、数十年前まではまだ一般的だったが、今日ではすくなくっている。これは嘆かわしい後退であり、西洋の偉大な学問の伝統のある種の衰退を示しているように思われる。日本ではほとんど知られていないバイヨ神父のような人物を紹介する意義は、彼ら代々の古典学者たちの仕事

を継承するきっかけにあり、日本の研究者に高度で深遠な学問の一端を届けることにある。

第二に、バイヨ神父は、2つの古代ローマ時代の史料を比較することを通じて、奴隷の法的・政治的特徴を浮き彫りにする方法を具体的に示唆してくれる。

第三に、この講演は、帝国時代を通じて依然として法的現実であった奴隷制の「キリスト教の普及による変容」の意義と、この社会のキリスト教化によって異教的奴隷制の過酷な結果を和らぎ回避することが可能になった方法と理由を理解するのに役立つだろう。

第四に、「逃亡奴隷」の主人間の人返し慣習の現象は日本史にもみられる。たとえば『相良氏法度』第四条は次のようになる。「一譜代之下人之事者無_レ是非_レ候、領中之者婦子によらず、来り候ずるを相互可_レ被_レ返也、寺家社家可_レ為_レ同前_レ、其領中より地頭に来り候ずるを婦子は其領主のまゝたるべし。」(『中世法制史料集 第三巻』二七頁)

この方法は戦国時代にも適用可能であり、また適用できると考えられる。戦国時代には、奴隷についての日本史料とキリシタン史料もあり、キリスト教化が急速に中断されたものの、それらの史料は当時の奴隷制の実態を理解させてくれるだろう。以上のことがバイヨ神父の講演を紹介する意義である。

すべての脚注は訳者が補ったことになる。

本文翻訳

キリスト教、聖パウロ³が伝道する教義は（古代ローマ帝国）において革命的だったでしょうか。

要するにキリスト教徒たちは古代ローマの社会において種を撒き、これらの種が少しずつ成長していくことによって古代ローマ帝国の信仰や文化

を破壊することに至り、野蛮人の侵略という外的な近因によって弱体化した帝国は一気に崩壊したということはあったでしょうか。

要するに、この説に従うと、古代ローマは長期にわたる社会上と思想上の中毒によって破壊されたということになりますが、実際のところどうでしょうか。

この検討をするために本来ならば古代の教父たち⁴を一人ずつ挙げて、社会を弱体化させた種があったかどうか、その種が引き継がれたかどうかを検討しなければなりません。

ご安心ください。これからその作業を控えますので、とりあえず一つの史料を紹介することによって、一例として、そのあたりを探りたいと思います。皆様の内に、他の授業ですでに取り上げた史料になりますので、重複あるのなら、ご容赦を。

皆さんに配布されている聖パウロによる「フィレモンへの手紙」を手がかりにしたいと思います。

そして、「奴隷制」という問題を取り上げたいと思います。奴隷制にかかわることを見ることによって、いくつか一般的な結論を出したいと思います。そして、講演は終わりますのでご安心ください。そこが私の最後の言葉になりますので、皆さまは私の講義から解放されます。「Ultima Verba」となります。

さて、まず、問題の所在を紹介しましょう。

ローマ社会をはじめ、古代の諸社会の基礎は自由人と非自由人という二極化構造にあって、奴隷制で成り立つ社会です。自由人は少数人であって、貴族層を成しており、生まれながら多くの特権の持ち主なのです。そして、残りの人々は多数の奴隷たちです。これらの奴隷は多くの種類がありますが、その身分は「人間以下」の存在だとされています。

このような奴隷制は大昔から存続していて、自由人と非自由人との間の

微妙な均衡によって、古代から社会は成り立ってきました⁵。

現代人から見たら「酷い」とおもわれるかもしれませんが、このように奴隷は人間以下の存在だとされて嫌だという気持ちあるかもしれません。

しかしながら、現代人の気持ちとは別に、このような事実があったことに代わりがありません。ここで古代奴隷制の詳しい説明には入りませんが、基本的に奴隷だったら、いつまでも奴隷であって、解放されることは稀でした。

これは残酷な身分だったといったらそうでしょう。当時、ギリシャローマ世界でいう人類を形成していた文明国家（野蛮人、異国人はその外にある）の三分の二、四分の三ぐらいの人口はいつまでも奴隷で人間以下の存在のままということは約束されていました。

そして、古代社会の長い歴史をみても、どれほど偉大な改革者であったとしても、激しい反乱者・革命家だったとしても、このような奴隷制に手を出すことはありませんでした。このような二極化した社会の微な均衡を覆そうとした人は一人もいませんでした。

まあ、ときどき、スパルタクスが導いた奴隷一揆は取り上げられますが、やはり例外であって、彼以外に、奴隷全員を動員して反乱を引き起こそうとした一人もいません。

このように、奴隷身分は身分として酷いものです。なぜなら、奴隷は自分のものでもないし、法律上の人格も認められていないし、奴隷は主の完全なる所有物です。主は気のままに奴隷を扱えます。奴隷には権利がありません。婚姻を結ぶ権利も、子供を産む権利も所有権も何もありません。そして、いつでも主人が奴隷を処分することが可能です。売買するか、殺すか、主人の意のままです。いわゆる法律上はそうになっていますね。実際、これほどあっさりできたとは限りませんが。つまり、奴隷が病気になっても主人には治療、世話をする義務もなかったし、奴隷を苦しめても

よかったし、奴隷を見捨てても何でもできました。主人の意のままでした。奴隷はこの意味で、「物」にすぎませんでした。保有される「物」であるとして、奴隷を意のままに利用しても乱用してもよかったです。

皆さんはご存知のことなので、このぐらいにしましょう。

しかしながら、奴隷だった男女たちは同意して奴隷になったわけではないので、大半は奴隷身分から逃れたいと思ったでしょう。しかしながら、現実問題として、奴隷身分から逃れる道はありませんでした。

唯一在り得たのは、絶望的にも奴隷が逃亡した時でした。しかしながら、逃亡していても、奴隷はいつまでも奴隷なので、解放されないし、本当の意味での逃亡にはなりません。

「あれ？ 奴隷であることは顔を見てもわからないだろう」と言われそうですが、実に言うと奴隷たちは刻印されていました。焼きごてで刻印されているので、いつまでも奴隷であることは知られて消せない印となっていました。一般的に身体のだこかに刻印していたか、時には顔にも刻印されることもありました。

このように逃亡しても、奴隷であることはすぐバレるものです。

しかしながら、残酷な主人にもう耐えられない時、奴隷は逃亡することもありました。

このような残酷な扱いはいわれたほどに一般的でもなかったのですが、あったのはありました。だから、逃亡奴隷もいました。時には強い性格の奴隷もあって、奴隷身分でこのような酷い虐待を受けて耐えられない時、このようにいつまでも生きられない性格の人も逃亡するものでした。そういった場合、悲惨な扱いを甘受することが難しい場合がありました。

その結果、逃亡は発生していました。

これに対して慣習法はどのように対処していたでしょうか。

逃亡した奴隷が見つかった時に法律上、どうすべきだったでしょうか。

ちなみに、逃亡した奴隷はほぼ必ずと言ってもよいほどに拾われたわけです。エジプトの遠い砂漠やあるいはアラビアの砂漠など誰もいない場所に行かない限り、奴隷は決定的に逃げようがありませんでした。でもそこへ行っている、この奴隷の将来はなかなか酷いものになっていて、なかなか行けなかったのも、逃亡奴隷はいずれか発見されて、罰せられました。

逃亡した捕虜と同じような扱いで罰せられていました。元の主人に戻されていたのです。

そして主人は逃亡した奴隷を罰することになりましたが、もう二度と逃亡したくならないような罰で、主人から奴隷への罰について、誰の介入も文句も指摘も認められませんでした。

またこのような元の主人への奴隷の返還は主人同士の互助的な意味がありました。つまり、主人が逃亡奴隷を拾ったら、彼を元の主人まで連行させて、「愛する友よ、貴君に属する奴隷を拾いましたので、お戻しします。敬具」といった感じの相互援助という慣習法がありました。

このような法がありました。

しかしながら、法は厳しく見えていても、古代人が皆、残忍で化け物だったわけではありません。奴隷も人間であったことは皆、勿論、認識していました。そして、確かに人間としての扱い、尊重も示されていました。少なくとも同じ人間性を共有する人としてですね。

そして、場合によっては、自由人と家庭内奴隷との間に、かなり近い関係になったり、親しい関係になったりすることもありました。

奴隷身分は身分として酷かったですが、具体的な実状はそれほどひどくもなかったのです。人間であるかぎり、人間同士の礼儀などが適用される

ことは普通でした。

そういったことを示す事例は無数にあります。公奴隷にしても私奴隷にしても、会話、日常の人間関係、感情と恋愛関係、仕事などをみたら、主人と奴隷との関係は、現代の使用人と雇用者のとの関係、あるいはモリエール⁶の喜劇に登場する奉公人と主人との関係を区別できない事例は多いです。要するに、主人の日常と一緒に過ごしている使用人なら、そのような親しい関係になるのも自然であり、この意味で、古代社会と近代社会とはあまり変わらないのです。

ただし、身分として決定的に違ったわけです。奴隷と主人の間に形而上学上、決定的に異質でした。日常の関係は親しくても、優しくても、ヒトらしくても、奴隷は奴隷でしたし、いつまでも思い知らされ続けられました。

だから、感情や人間的な事情が過ぎると、老人になると、主人が変わると、どうなるか何の保証もなく、主人の意のままでした。処分されたりして、世話されなくなり、何でも。

最期まで主人によって可愛がられたとしても、奴隷は人間以下の存在でした。(貶められた人だった、汚れた人だった、下人だったわけです)。

いままで、ちょっとした復習でした。これからの話を理解するためのおさらいでした。ソルボンヌ大学で私の授業を聞いた方がいらっしゃったら重複になって申し訳ありません。

さて、お配りしたのは興味深い二つの史料なのです。両方とも、逃亡した奴隷を見つけた自由人が元の主人に返す事件の事例です。原文と対訳があるはずです。

一つは小ブリニウスの手紙です。もう一つは聖パウロによる「フィレモンへの手紙」です。

聖パウロの手紙はパウロの友であるフィレモンという人に宛てられていますが、フィレモンの一人の奴隷がパウロのところに避難したことを伝える内容です。引用しましょう。

「キリスト・イエズスの囚人であるパウロと兄弟ティモテオより、愛する協力者フィレモンと、姉妹アピアと、戦友アルキボと、あなたの家にある教会に。父なる天主⁷と主イエズス・キリストからあなたたちの上に恩寵⁸と平和があるように。

私は祈るとき、いつもあなたを思い出し天主に感謝している。主イエズスとすべての聖徒たちへのあなたの愛と信仰を聞いたからである。私たちがともに有している信仰が、私たちの間でキリストのための行われるすべての善業を人に深く知らせることによって効果あるものとなるように祈る。兄弟よ、私はすでにあなたの愛を知って、大いに喜びと慰めを得た。なぜなら聖徒たちの心はあなたによって慰められたからである。

そこで私はあなたにふさわしいことをキリストにおいてはばからず命じることできるが、むしろ愛の名であなたにこう勧めたい。キリスト・イエズスのために今捕われの身である年老いた私パウロは、鎖の中に生んだわが子オネジモのことについてあなたに勧める。彼は先にはあなたにとって不利な人であったが、今はあなたにとってもわたしにとっても、大いに役立つ人となった。

私は彼を、つまり私の心をあなたの下に送り返した。私が福音のために捕われている間、あなたの代わりに彼に仕えてもらいたかった、あなたに知らせないうちはどうとも決めたくなかった。

強制的ではなく自発的に、あなたの恵みが出ることを望んだからである。彼がしばらくの間あなたを離れたのは、おそらく彼を永遠に取り戻すため

であつたろう。(先生より、ここからは肝心な部分となる) もはや奴隷としてではなく、奴隷よりも愛する兄弟として戻されるためであつたろう。私にとってもことにそうであるが、ましてやあなたは肉においても主においても彼を愛さねばならぬ。あなたが私を仲間だと思っているのなら、私を迎えるのと同じように彼を迎えよ。もし彼があなたに不正なことをしたことがあるかまたは負債があるのなら、それを私の勘定に入れよ。私パウロは自分の手でこれを書いた。私がそれを払う。あなたが私に対して負債のあることは今は言わない。その負債はあなた自身である。そうだ、兄弟よ、主において、私はあなたがこの奉仕をしてくれるのを待っている。キリストにおいて私の心を慰めよ。

私はあなたの従順を確信し、私の言ったこと以上に応じてくれるであろうと知っているのでこれを書いた。

それと同時に、私の宿を調べよ。あなたの祈りによって、私の体があなたたちに送り返されることを希望しているからである。

キリスト・イエズスにおいて、牢獄の私の仲間であるエパフラからよろしく。私の協力者、マルコ、アリストアルコ、デマ、ルカからもよろしく。主イエズス・キリストの恩寵があなたたちの霊とともにあるように。アーメン。」

以上はフィレモンへ送られた聖パウロからの手紙です。事情を改めて思い出しましょう。

その時、パウロは晩年であって、長年布教活動をつづけましたが、牢獄に入れられて、そろそろ死刑執行される時期です。

そして、パウロのお陰で回心した一人、フィレモンへその手紙を送ります。ようするに、パウロの手から洗礼⁹を受けたフィレモンは聖寵¹⁰の命、つまり本物の命、主の命を受けた恩人であるということです。

なぜこの手紙を送ったのでしょうか。フィレモンの一人の奴隷はオネジモですが、フィレモンから逃亡して、パウロの下に避難を乞いました。

なぜなら、オネジモは聖パウロがフィレモン之家に依っていたとき、彼を見て「善い方ではないのか、彼に頼みに行ったら何とかしてくれるだろう」と思ったので、聖パウロの下に行ったのでしょう。もちろん、オネジモの詳しい事情は知られていないし、なぜ逃亡したのかも不明です。また直接パウロの下に来たのか、あるいは逃亡してから、捕らえられた死罰になるような脅かしがあったのでパウロに来たのかは不明です。

つまりオネジモは逃亡した場合、官憲あるいは普通の自由人に捉えられたら元の主人に戻されて酷い目に合わせられることを知っていたのでパウロの下に行ったというような事情であったかもしれません。

そしてオネジモはパウロをよく見ていたので、パウロなら、主人に話を付けてくれるでしょう。何とかしてくれるでしょう。これほど善い教を家で説いていたから。とオネジモは思ったかもしれません。

あるいはパウロの下に直接にきたか。いずれにせよそれは不明であって、小説的に語っていても仕方ありませんし、そのあたりは重要ではありません。

要するに、この奴隷はパウロの下に避難しているということです。

パウロは牢獄にいても、ローマ市民なので、自由人なのです。

ですから、本来ならば、慣習法に従って、パウロは奴隷を元の主人に返す義務があります。市民としての誠意にかかることです。失われた物をその所有者に返すべきです。そうしなければ、盗人となってしまいます。市民としての資格が問われることになります。

奴隷ならなおさらのことです。

そして、当然ですが、返された奴隷は主人に罰せられることになります。基本的に厳しくて。

これは法律です。

そしてパウロは法律に従って、拾った奴隷を本主人に返します。皆様、おそらく「このような場合って、私なら、何とかして、この奴隷を逃げさせて何もなかったかのようにしたらよいのでは？あるいは拾わなかったことにしたらいいのでは？」と思うかもしれませんが、それはパウロにとって論外です。

拾った奴隷を返します。義務を果たします。

これに似た案件が小プリニウス¹¹の手紙で示されます。

事情は全く同じです。

小プリニウスはサビニャヌスに宛てた書簡で、サビニャヌスも一人の奴隷を失っていました。

というか、サビニャヌスの逃亡した奴隷は小プリニウスの下に避難しにきていました。なぜなら、小プリニウスは主人の友であり、弁護士であつたし、そして他の史料でも知られるように、小プリニウスはなかなか感じのいい人で、教養者で、皆に良い印象を与えていた人でした。特に友達の家を訪れた時、小プリニウスは家庭内の奴隷たちへ善い印象を残していたので、この逃亡奴隷は小プリニウスのところに行ったら、しかも弁護士なので、何とかしてくれるのではというような目論見は奴隷にあったでしょう。全文を引用しましょう。

「サビニアヌス宛

あなたがたいそう腹を立てていると言っていた、当の解放奴隷が、私の所に来て、まるであなたでもあるかのように、私の足許に平伏し、膝に取り縋りました。

さめざめと涙を流し、嘆願し、長い間黙り込んでいました。要するに、彼は後悔していることを私に信じ込ませたのです。確かに彼は、自分が過ちを犯したことを認めているので、改悛したものと私は信じます。

あなたが怒る気持はわかります。怒って当然です。それも理解できます。

しかし、怒るべき理由が至極正当であるとき、優しくしてやることは格別称賛に値しますね。

あなたはその男を、可愛がっていました。そして、将来も愛することでしょう。私はそれを望んでいます。当分の間、あなたは気持ちを和らげるだけで十分です。

もし彼がそれに値したとき、あなたはもう一度怒ることが許されましょう。一旦気持ちを和らげていたので、なおさらその言い訳がたちましよう。

彼の若さを少し酌量してやってください。彼の改悛の涙に免じ、あなたの寛大な心に免じて許してやってください。

彼をもう苦しめないように、あなた自身をも苦しめないように。なぜなら、あなたは優しいから、怒ると苦しいはずです。

もし、今私が彼の嘆願に加え、一緒になって嘆願すれば、頼むのではなく、強制するととられはしないか、それを恐れています。

しかし、私は彼に今後、もう二度と執り成しはしないときつく脅し、烈しく厳しく叱っただけに、いっそう切実に真剣に一緒になって私も嘆願したいのです。

脅かさなくてはならなかったのは、彼の方で、あなたではありません。おそらく、私はもう一度あなたに許しを乞い、再び叶えて貰うかもしれません。私来い、あなたが与えるのが相応しいという状況が続く限り。」（國原吉之助訳、『プリニウス書簡集』、講談社、1999、362-363）

かつて、以上の二つの書簡をコメントして比較してみました。

両方を並べて読んだら、何が大事なのかはすでにご理解できたでしょう。

まず、事情は全く一緒ですね。逃亡した奴隷は主人の知人の内の一人のところに避難しに来ています。そしてどちらも、主人の知人は奴隷のために取り成していますね。

ちなみに、このような史料を通じて、奴隷制だからと言っていつも通常に残酷のような事ではなかったことが示されます。人らしい感情で動かされて、奴隷に対しても優しくしてあげるような人々もいました。野蛮人ではなかったのですね。

つまり、「友よ、奴隷を迎えて、優しくしてね。あまり厳しく罰しないでね。友人から願いだから」というところです。

そこまでパウロと小プリニウスは似ています。

ところが、異なる点もあります。

小プリニウスの場合、確かにこの書簡は本当に程よく綴られて抗しがない魅力がありますね。もしもこのような書簡が届いたら、それを読んだら、すぐ、奴隷を迎えて、「君は恵まれた子だね。小プリニウスが頼んでくれるのだからね」ということで、優しくしてあげたいかなるでしょう。

しかしながら、それでも奴隷は奴隷のままであり、よくても依然の状況と変わらないわけです。

小プリニウスの書簡は自由人同士、対等な関係を前提にして、「あなたは奴隷を失ったので、彼を拾って返します。優しくするようにお願いします。やはり憤怒してしまったら健康にもよくないし、また我々の精神上的の均衡を考慮して、彼を酷く罰しない方がいいのでは。だから落ち着いてもらいたいものです。われわれは哲学者だし教養人だし、彼がミスしたかもしれないが、我々は人間の弱さを偉く考慮してあげることになるので、優しくしてあげよう」と言わんばかりですね。

言いかえると、主人同士は、ペットを元の主人に戻すかのような感じですね。それはそれでやさしいですね。「ほら、この可愛いペットを虐めるわけには行けないだろう」という感じですね。

パウロの場合はどうなるでしょうか。やはり、事情は同じだとしても、中身はかなり異なります。

パウロの場合、「彼をあなたに返しますが、注意してください」というところがあります。

ちなみに、パウロの書簡においてかなりユーモアが入った部分もあります。それについて詳しく申し上げませんが、一つ二つだけ示しておきましょう。

たとえば「私パウロは自分の手でこれを書いた」というところは面白いです。ご存じのように、当時、だれも自分の手で書簡を書く者はなかったわけですから、聖パウロも一緒に秘書がありました。

そして「私がそれを払う」と。パウロには金がない事実は周知の通りだったのということです。なんか、フランソワ一世にマローが宛てた手紙の中に、「私が返すべき金額を百倍でも返そう」云々（うんぬん）とありますが、フランソワ一世はマローに一銭もないことを知っていたような感じですよ。いわゆる「ガスコンロ（地方）の約束（注・フランス語の諺です）」という類いですね（注・つまり、最初から果たせないことは明らかで周知であるような約束）。

聖パウロの「私がそれを払う」というところはそういった側面がありますが、なぜそういった部分をいれたのでしょうか。

いわゆる、金銭だけで勘定するのではなく、パウロからフィレモンが貰った恩を思い知らせて、どれほどパウロは恩人であるかを思い知らせるためです。

なぜなら、フィレモンはパウロの一生の恩人だからです。

さて、パウロは奴隷を返しますが、フィレモンに何を求めるのでしょうか。どの価値観で奴隷を迎えさせようとするのでしょうか。

情けですか。あります。友人パウロが頼んだからか。あります。しかしながら、拾った奴隷としてだけ迎えるでしょうか。違います。「兄弟」として迎えるべきだと。

「もはや奴隷としてではなく、奴隷よりも愛する兄弟として戻されるためであったろう。」

奴隷のままではありますが、それよりもフィレモンにとって兄弟となりました。

なぜなら、同じく洗礼を受けた身なので、フィレモンもオネジモも同じ天主の子となって、また二人ともパウロから洗礼を受けたとして、パウロから見てフィレモンとオネジモは全く同じ立場となったからです。

「私は彼を、つまり私の心をあなたの下に送り返した。私が福音のために捕われている間、あなたの代わりに彼に仕えてもらいたかった、あなたに知らせないうちはどうとも決めたくなかった。」

つまり、パウロは奴隷を返すのではなく、自分の子を返すということです。そして、フィレモンに対して「もう一人のあなたを返す」ということを思い知らせます。

そこは小ブリニウスとの同類性と違いは見られます。

聖パウロの場合、決定的に違うのでしょうか。ある意味で違いますがある意味で一緒です。オネジモを奴隷として返す点としては変わりありません。オネジモはこの意味で奴隷のままで解放されていません。パウロはオネジモを解放するようにフィレモンに一切要求していません。フィレモンは失った奴隷を奴隷として受け入れます。身分上は何も変わらないのです。

しかしながら、この奴隷は[・][・]加えて、フィレモンの兄弟でもあります。そ

こが小ブリニウスと決定的に異なります。

信仰、愛徳、洗礼によって天主の継承者となった資格によって、フィレモンとオネジモが兄弟になったとパウロはしつこく思い知らせます。

以上のように、不思議にも同時代の、同事情、それから並行に走っている両文章を通じて、基本秩序に対するキリスト教の在り方が端的に著しくわかります。

他にも（回心したガリオンの兄弟に当たる異教徒）セネカによる文章も面白いですが時間の問題で割愛します。

しかしながら、以上の単純な比較から、キリスト教による形而上学、政治と社会哲学、それからキリスト教のやり方も現れます。このように、ゆっくりとした形で、福音的な種を撒いて、少しずつキリスト教化したローマ帝国に至り、それから中世王権に至る筋道がわかります。

出発点はやはり聖パウロのこのような書簡にあります。

理解していただけたでしょう。

聖パウロをはじめ、キリシタンたちは既存の秩序を肯定して、一切それを覆そうとしません。むしろ、それを維持します。諸制度、身分秩序のすべては維持されて肯定されています。

いわゆる、不正なる制度を含めてです。例えば、奴隸身分という残酷な身分をも含めてです。否定されてはいません。

しかしながら、これらの不正な制度の支配下にいる人々の靈魂には福音的なキリスト教的な種を撒いて、この種が生えたら、その制度の変質を伴うか、廃止を伴うようになります。奴隸制はまさにそうでした。好例です。

このように、外から制度などは保全していて、何の革命もなく、何の政治運動もなく、制度内の人々から自発的にそれらの不正や制度上の不十分

を改善していくやり方になります。そして、長い時間をかけて少しずつ制度も変わって、悪い制度はなくなって（奴隷制）、それから他の制度は洗練されていきます。

結果として、主人と奴隷の関係と秩序はキリスト教化によって完全に変貌するようになりました。奴隷は奴隷のままであっても、同時に主人の兄弟になるので、もはや主人は好き勝手にできなくなります。彼の救いはかかるようになります。

奴隷制はあくまでも一例に過ぎなくて、政治上、国家上の他のすべての関係などは同じように「キリスト教化」されていきます。

別の講演でもやるべきですが、とりあえず、皆様、そういった検討の出発点をここで示すことにします。

もう一点注意していただきたいことです。このような「キリスト教化」のプロセスにおいて、言葉ですら変わらないわけです。新しい制度、新しい秩序、革命のようなことはありません。

オネジモは引き続きフィレモンの「Doulos, Servus」であり、つまり奴隷のままです。

秩序の関係はそのまま維持されています。

しかしながら、主人との関係は全く同じではないわけです。

パウロなら、それを望んだのなら、簡単に革命を引き起こせたわけです。想像してください。ペトロ、パウロ、他の使徒をはじめ、彼らは大勢の人々の回心を得ました。ときどき、一度で数百人ぐらいの人々も洗礼を受けました。

一瞬でも、パウロをはじめ、他の使徒たちが政治運動、革命的な運動をやろうと思ったら簡単にできました。それを促すような手紙をあちこちお

くって、説教したら、一気に反乱になっても常識的に考えたらおかしくないのです。

例えば、オネジモの場合に戻りましょう。革命的なやり方だったら、パウロはオネジモの回心を利用して、「彼はもはや奴隷にあらず。解放せよ。拒まれたら奴隷らは一揆させよう」というような事は容易にできたわけです。

しかしながら、それらは滅多になかったのです。

もしもこのような革命的な要素があったのなら、なかなか酷い乱の世になったでしょう。また残酷な制圧になったでしょう。

このように、パウロをはじめ、クリシタンたちは既存の秩序を肯定していました。

ただし、その秩序の正当化は完全に違う理由に基づいていました。

このように制度を支える原理、種は変わったら、必然的に時間がかかっていても、制度も変わるわけです。

このように、臣下と君主、主人と奴隷、夫と妻などの関係はキリスト教以前と違って、それぞれ絶対的な依存状態にあるとされていません。

前は、限りなく権力関係は絶対的でした。皇帝権、親権、主人権など。

ところが、キリスト教徒になると、妻は夫と同じくキリストの御血によって贖われた姉妹となります。キリスト教以前の女性の状況は確かに厳格なところがあったわけです。

主人と使用人も同じです。使用人のままでありながら、主人は彼を兄弟としても扱ったら、ぜんぜん違う世界になっていきます。

このように少しずつ、すべては変わっていきます。

しかしながら、社会の基本秩序を尊重して肯定します。何も覆そうとも変えようとも廃しようともしません。ところが、福音的な種を撒いて、少しずつ新しい均衡へ発展していきます。

このような変遷は必ずしもいつも平和的ではなく、軋轢ももちろんありました。そして、ある時、転覆もおきざるを得ません。(奴隷制はなくなるとか)

しかしながら、そのような結果はある意味で狙われなかったし、み摂理の計画において、このような発展は自然に成長していくようにされたかのようです。暴力的なやり方ではなく、革命的なやり方ではなく、既存の良い制度などを改善して、悪の種を少しずつ取り除くような。

その変更は言葉の意味の変更によって果たされました。

主人と奴隷は主人と使用人になっていくとともに、加えてお互いに**兄弟**にもなります。

絶対君主は君主のままになりますが、あたかも臣下は彼の物、彼の身であるかのような、臣下は皇帝の物であるかのようなところはありません(注・公民公土の思想否定)。君主にとって臣下はもはや「下」の人々ではなく、指導してあげるべき兄弟たちとなります。このように数世紀を経て、フランス国王は登場することになり、国王の救霊、永遠の救いにかかって、フランスのすべての家族の幸福と臣下全員の救霊の責任を負うような王権へ発展していきます。しかしながら、このようないともキリスト教的な王権になるまで時間がかかりました。

それはともかく、その出発点は聖パウロの手紙で見られるように、そして13世紀のフランスはある意味でその到着点です。

このように、前の講演の際、定義した通りの「秩序転覆」はあったと言

えましょう。つまり、意図的に福音の種を撒いて、言葉遣いを本質的に変えることによって制度、風俗も少しずつ改革されるようになって、価値観の転覆に至ります。

この意味でキリスト教による秩序転覆はありました。聖パウロはそのやり方を具体的にしました。但し、厳密に言うと「秩序転覆」ではありません。なぜなら「秩序転覆」という時、悪意を以て既存の秩序を覆すような革命的な要素がありますが、キリスト教の場合、そのあたりに減多にありませんでした。

むしろ、救霊¹²を目的にして、原理原則を改めようとされてきた少しずつの改善という形になりました。

そこで、言葉のニュアンスを活かして、このような社会改善のために、「秩序転覆のための手段」は利用されてはいますが、秩序を転覆させるために利用されるわけではないので、キリスト教は近代的なイデオロギーと違って秩序転覆、社会破壊のようなことを伴いませんでした。

つまり、特に言葉の意味を変えるような手段は使われていますが、創世記の検討の時、サタンがアダムとイヴが成していた社会を破壊させるために言葉の意味を意図的に変えてアダムとイヴを騙すようなことではなく、三位一体的な社会の誕生のために、天主の生命が流されている社会の誕生のために、言葉の意味は改められて、秩序的にいうと楽園以上の社会へ発展していきました。

それは使徒たちなど目的であって、社会破壊はなく、既存の自然上の構造、秩序を改善して、超自然の生命を流すような「キリスト教的な改善」があったと言えるでしょう。

必ずしもスムーズに行ったわけではありませんでした。

例えば、奴隷制の場合、どうだったでしょうか。

文字通りに奴隷は主人の奴隷になっているのなら、奴隷から見て、主人と同じテーブルで食べてもいいのでは、ちょっと砕けた形で話し合ってもいいのではというような短絡的な結論を導きかねないので、時々、このように誤解した奴隷は「革命的に」手を出したこともあったし、逆に兄弟同士であるはずなのに、いわゆる時々、より深い絆で結ばれているせいで、現に兄弟である故により深い憎しみに繋がることもありました。

いわゆる、キリスト教徒になったから、人間性は変わるわけではないので、罪人であることに關して変わりません。その点では何も変わりません。

しかしながら、そしてそれでそろそろ終わらせたいと思いますが、諸秘跡などを通じて、啓示、真理の教えによって、罪に打ち勝つための武器は与えられています。そこは違います。

また天主のみ旨、天主のやり方でしょうが、原罪によって転覆された原始社会を改めるために、自然法、人間性にあるすべての健全な事柄を肯定して維持して、つまり、生きている社会の基本構造、上下関係などを肯定して、その上に聖寵を加えて、超自然を加えて、正しい原理原則を撒くことによって、少しずつ全体の改善の治療が図られて、罪による一番醜い汚点、そのがんをけすようなやり方はキリスト教化の別名ではないでしょうか。

歴史を見たら起源初期から数世紀が経って、多くの聖人を輩出する深くキリスト教的な社会になっていきました。

でも数千年以上に発展してきた罪による癌、不自由を治すためにやはり時間がかかりました。

これは自然の秩序に相応しいからです。天主は社会について法則、原理を決定したので、それを破る例外的な奇跡などを基本的に好まれていないのです。

善い成長、良い発展をわざわざ乱暴に早めるわけにはいかないところでしよう。

というのも、キリスト教徒になってキリスト教的な生活を営むのは、他にもない自分自身に対する罪の支配からの奪還と聖徳における少しずつの上達であって、そして、共同体の多く靈魂はこのように上達を遂げることができたら、社会、諸制度なども自然に改善されていきます。

父を敬って父性を敬愛する原理と同時に、兄弟的な生活を営む原理。父なる天主、兄弟なるイエズス。イエズスは天主でもあるという教義から人間関係の改善。そして、父と兄弟との関係には愛徳の実践によって完成されて、聖母マリアの母性によって、それをスムーズに。

このように、イヴが神々のようになれるのではないかと思ったせいで犯した罪から歪曲された権力、社会関係を糺して、本来の秩序を取り戻すのはキリスト教化の別名と言えましょう。

大事なのは、このような改善、本来の秩序の奪還は一切、革命にならない、暴力を使わないわけです。

以上の「キリスト教化」の過程の真逆はジャコバン主義なのです。

知識においても、人間関係においても、すべてを「計算」「計画」して、損益で考えて、頭よすぎるあまりに愚かになる合理主義、近代化の過程です。

天主が創造した生命のリズムに合わせることがなく、無理やりに強制的に各イデオロギーが断定した型に人々をいれるような非キリスト教化の過程です。

キリスト以降の歴史は原罪によって壊れた社会の回復の歴史なのです。あなたの兄弟なるオネジモを返すというところです。

そして回復した社会を改めて破壊させるのは「近代化」です。革命です。短期にしか考えない革命、つまらない利害関係ばかりを考える一揆、利益、民族主義、イデオロギー、なんでもいいですが、いずれにせよ一から新しい社会を作ろうとする野望に基づく革命とは随分違う過程です。

キリスト教化はその逆です。「Renovabis faciem terrae」（世界の顔は回復されるだろう）ということですが、その過程はゆっくりであるとして、長い歴史を必要とするし、み摂理の道次第などところもありますので、人為的に無理やりにさせようようなものではありません。

このように人間性を尊重して、尊敬して、多くの軋轢と弊害は避けられます。当事者の忍耐力だけは求められます。このような忍耐力を果たすのは簡単なことではありません。

今日は奴隷制の事例を取り上げましたが、他にも多々あります。

例えば学問も奴隷制と同然です。

だいたい、すべての観念などは歪曲されていた状態でした。キリスト教化によって、学者が利用していた観念を糺して、精錬して、より高度な意義を付与することによって、多くの誤謬や間違いは改善されました。

例えば「ロゴス¹³」について事例を取り上げましょう。天主は肉体にな

り給うた時代、聖ヨハネが書いている時代なら、ロゴスの一般的な意味は「計算」「理性」など、人間の理性の一番高度な能力を指していました。

しかしながら、キリスト教の学者たちによって、さらに付加価値がその言葉に与えられました。既存の意味は維持されていても、加えて、さらなる意義が与えられました。つまり三位一体の第二の位格、イエズスを指す言葉となりました。言いかえると天主の智慧を意味して、また御托身即ちご降誕した天主の御子をさすことになりました。

聖ヨハネの序文を見てください。その文章によって、人間の知性は新しい光によって浴びられて、キリスト教化された学問の出発点となりました。同じように、以前の学問上の秩序を肯定することを前提に、聖寵の働きを加えて、少しずつの改善は計られました。

人々の回心のためにも、新しい言葉、創造するわけにはいきませんでした。皆、利用している言葉の正しい側面から入って、より高度な意義へ、超自然の意義へ引き上げるようなやり方です。

(一方、革命は既存の言葉の意味と逆の意味か完全に違う意味かにするか、訳の分からない造語を通じて、革命を進めるやり方と対照的です)。

「聖なる」という言葉もロゴスと同じようにそのキリスト教化の過程は確認しやすいです。

古代人は「聖なる」という概念がありました。儀礼上の清め、正しさのようなことでした。無碍のようなところでした。

ユダヤ人も「聖なる」という概念がありました。基本的に律法に遵法したら「聖なる」という意味がありました。

それについてフェストゥジエール神父¹⁴の研究を参照してください。ちなみに、本日の講演のために、大きくフェストゥジエール神父に頼って、別の課題に転用しました。

天主の啓示によって、本当の意味での「聖なる」ものは儀礼上の清めなどではなく、天主のみ旨に従うこと、聖霊の導きを聞き入れるようにいつも自分の靈魂を開けるようにして、天主のみ旨のままに言動していくことこそは聖人になっていくという意味は天主によって啓示されました。このようなことができたなら、異教世界での清めと遵法よりも遥かに精錬された形で、そして霊的な意味で、清められて、掟に遵法することもできるよという風に啓示されました。

この意味で、一般的に利用されていた言葉に既存の意義をなくさないで、それを昇華させるような形で、新しい意義が加えられました。学問上のキリスト教化です。

宗教上も政治上も社会上も以上のようなキリスト教化はありました。天主の生命という斬新なことは取り入れられました（超自然の次元¹⁵）。

そして、このように天主の生命は取り入れても、既存の秩序の否定を意味ではなく、すべての既存の秩序は維持されています。知性上の合理性、言動上の道徳、政治上、社会上のやり方を維持して、改善されていきます。

そして、このようなキリスト教化は完全すると、人々も制度も「Sicut Dei」になって、神々ようになっていきます。

ご清聴、ありがとうございます。

注

- 1 出典は聖ピオ十世学院で発表されたフランス語の講演であって、1991年5月27日にされて、2022年8月5日にインターネットで公開されたのである。[Abbé BAYOT - Paul de Tarse ou la subversion religieuse - YouTube](https://www.youtube.com/watch?v=mPXm1FMsk6E&t=5571s) ○ <https://www.youtube.com/watch?v=mPXm1FMsk6E&t=5571s>
- 2 ジャン・バイヨは教区司祭でもあり、パリ郊外の地元の宗教的遺産、そして聖伝ミサすなわちラテン語ミサと聖伝の教義を守るために、地元で団体をつくり活動をし続けた。この団体は破壊されるべきだった教会の石材を使って小さな御堂を建築し、今

でも聖ピオ十世会の司祭たちがそこでミサを捧げる。

- 3 タルソスのパウロ（聖パウロ）は、ユダヤ名サウロとも呼ばれ、1世紀の初め、おそらくキリキアのタルソスで生まれ、紀元67年にローマで殉死した。ユダヤ人でローマ市民であった彼は、ラビーとしてユダヤ教のエリートでもあるファリサイ人としてナザレのイエズスの弟子たちを迫害した。特に、キリスト教最初の殉教者である聖ステファノのユダヤ人による処刑に立ち会った。42年、ダマスコへの道で奇跡的に改宗し、13番目の使徒となった。最も熱心なキリスト教徒迫害者から、最も熱心な伝道者となった。

タルソスのパウロは、小アジア、ギリシャ、ローマの初期キリスト教共同体だけでなく、ユダヤ教やユダヤ教圏外にキリスト教を広めた主要人物の一人となった。キリスト教では、彼のことを「異邦人への使徒」、すなわちユダヤ人以外の人々、あるいは「異邦人への使徒」と呼んでいる。彼は常に、使徒の第一人者であり教皇の第一人者である聖ペテロと関連付けられている。聖ペテロはユダヤ人として十字架につけられ、そして聖パウロは市民である特権のゆえに、ローマ市民として斬首された。

新約聖書の一部であり、当時のローマの実情を知る上で貴重な史料である数多くの書簡を残している。

- 4 教父たちは初期キリスト教期の神学者であり（多くが聖人、2世紀から8世紀まで）、使徒的伝統を引き継ぎ、神学の基盤をしいた。今でも神学においてある題目は教義であるかどうかを判断するために、教父たちの多くは同意しあうかどうか一つの大きな基準となる。

聖アウグスティヌス、聖ヒエロニムス、オリゲネス、聖アレクサンドリアのクレメンスをはじめ、数十人いる。

- 5 法律上に厳然として区別されている。2世紀にできたガイウスの *Institutes* の第一巻、第一章に「*Omnes homines aut liberos esse, aut servos.*」[「すべての人々は自由人であるか奴隷である。」] 因みに、これを見る限り、奴隷は「人」であることは明らかである。また奴隷であるからと言って、どういった具体的な生活基準は想定されていない。またガイウスの *Institutes* を始め、古代ローマ法の古典などのすべてはキリスト教が広まってからできた法典であるが、今までの研究史上、キリスト教のそれらの法典への影響はほとんど検討されてないままである。しかしながら、以上のように、法律上に奴隷が「人」であるといったような区分も、後の *Institutes Justinianus* あるいは *Digesto* に登場する自然法、それから自然法上にすべての人々が自由人で生まれているものの、*Gentium jus*（慣習的国際法）によって奴隷となる人々もいるといった原則などはキリスト教からの影響を見受けないことはあるまい。天主の前に、すべ

ての人間は同じ人間で平等であるというキリスト教の基本的な教義は、以前の異教社会で前代未聞のものだっただろう。

- 6 モリエール (Molière) として知られる、ジャン＝バティスト・ポ克蘭 (Jean-Baptiste Poquelin、受洗1622年1月15日－1673年2月17日) は、フランス王国ブルボン朝時代の俳優、劇作家。ピエール・コルネイユ、ジャン・ラシーヌとともに古典主義の3大作家の1人。悲劇には多くを残さなかったが、鋭い風刺を効かせた数多くの優れた喜劇を制作し、フランス古典喜劇を完成させた。モリエールの作品－詩や散文による30ほどの喜劇、バレエや音楽の伴奏の有無にかかわらず－は、フランスにおける文学教育の柱のひとつである。この作品は、フランスのみならず世界中で大成功を収め続けており、世界文学の基準となっている。

忠実な使用人というモチーフは、モリエールの喜劇にしばしば見られ、フランス大世紀における古典的なトポスを描いている。忠実な使用人は、主人の最も親しい友人であり、その理由は、彼が同じ世界に属しておらず、主人との社会的な競争や情事的な競争から外れているからである。このように、付き人なる使用人は通常、家族、恋愛、社会的な問題で主人を助ける。

- 7 カトリック神学における「創造主」なる神を指す。「天主」という言い方は、神仏と区別するために、戦国時代の時から使われた「Deus デウス」の訳語である。今でも浦上にある「天主堂」などはその名残である。中国語圏の東洋でも「天主」は通用されているとして、用語の正確さを重視し、カトリックの三位一体なる一神を指すときに、「天主」と訳した。

- 8 カトリック神学用語の一つである。イエズスの命であり、賜物として、イエズスによって制定されたカトリック教会の七つの秘蹟を通じて、人々に恩寵が注がれているとされている。フランス語の「grâce」、ラテン語の「gratia」に当たる。無償、賜物という意味もある。この世の生活なる自然次元の命に対して、天主レベルの超自然な命を指す言葉でもある。

恩寵論で、プロテスタントは古典神学を否定して、カトリックと対立した。

- 9 カトリック教会の七つの内の一つの秘蹟である。イエズスによって制定されたもので、カトリック教会、イエズスの神秘体の一部になるための最初の秘蹟である。この秘蹟を受けて初めて、霊的な刻印が押されて、信者となり、カトリックの他の秘蹟を受けることができ（特に、聖体拝領と告解）、信者に課する義務を果たさなければならなくなる。幼児洗礼の場合、親がキリスト教的教育を与えること約束し、大人洗礼の場合、求道者が教義を習ったうえで、自由に同意して洗礼を受ける条件がある。

神学上というと、洗礼の効果として、原罪を払う秘蹟であるが、それによって初め

て恩寵を受けることができ、それから初めて永遠の命すなわち天国に行くことができる」とされている。生まれたときはこの世に生まれたことに対して、洗礼を受けた日は天に生まれた日だとされている。

古典的なキリスト教圏の国々では、生まれてからなるべく早く洗礼をうけるように促され（なぜなら洗礼なしに早世したら地獄あるいはリンボに墜ちる危険があるからである）、多くの場合、生まれた日に受けることになり、今でも史料としてよく使われている教会の洗礼台帳には生まれた日ではなく、洗礼日が記入され、いまでも一般的にその洗礼日を「誕生日」として認識されている。

10 以上の脚注、恩寵を参照。

11 プリニウスは、紀元61年か62年にキサルピナ・ガウルのコモで生まれ、113年頃、おそらくアジアのビティニアとポントス州で没した。ティトゥス朝からトラヤヌス朝にかけてのローマの弁護士、政治家である。トラヤヌスの側近で、100年に執政官に任命され、元老院議員となり、111年から113年にかけてビティニア州とポントス州の総督に任命された。

母方の叔父である博物学者プリニウスの養子であった小プリニウスは、その文学的業績で最もよく知られているが、その一部は現存しており、特に書簡が有名である。

小プリニウスの書簡は、ネルヴァとトラヤヌス帝の時代の帝国の支配者層の生活と考え方を示す類まれな証言である。また、79年のヴェスヴィオ火山の噴火で叔父が亡くなったことを記した手紙など、裁判の様子や特定の人物に関する情報もある。ポントス・ビティニアに任命期間の皇帝とのやりとりは、ローマ帝国の一地方の行政に関する非常に具体的な歴史的資料である。

12 カトリック神学の用語。靈魂を救うという意味であるが、イエズスによって指定されたカトリック教会という完全社会の主な目的である。言い換えると、国家がこの世で人間の幸せを目的にしていることに対して、教会が天国に行ける、永遠の命を得るという意味での「救霊」を目的にしている。救霊の目的は、イエズスの托身と贖罪によってもたらされた救済を教会を通じていつまでももたらし続けることであり、歴史の中に教会がそれを第一の目的にして活動し続けた。

13 ギリシャ語の「言葉」というが、古代ギリシャ哲学者によってよく使われてきた概念である。新約聖書において、「ロゴス」というとき、「み言葉なるイエズス」を指すことが多い。三位一体の第二位格なるイエズスは「ロゴス」とも呼ばれていて、ラテン語で「Verba」となっている。

14 アンドレ＝ジャン・フェストゥジエール（André-Jean Festugière、洗礼名がジャン・ポール・フィリップ・フェストゥジエール）は、1898年3月15日にパリ八区で生まれ、

1982年8月13日にサン＝ディージェ（オート＝マルヌ県）で没したフランスの哲学者、ドミニコ会士、言語学者、新プラトン主義、特にプロクロスの専門家である。ヘルメス・トリスメギストスの著作を仏訳・編集したことで知られる。

1942年から1968年まで高等研究実習院（École pratique des hautes études）の教授を務め、1958年にはフランス文学院（Académie des inscriptions et belles-lettres）の会員となった。

初期のキリスト教と相互作用する異教古代の宗教思想を研究対象としてきた。エフェソス公会議、カルケドン公会議、新プラトン主義の哲学者プロクリス、いわゆるヘルメス・トリスメギストスが著した『ヘルメティコス（Corpus Hermeticum）』など、数多くのテキストを編集・翻訳した。「フェストウジエール神父は生涯を通じて、異教的な文脈におけるキリスト教の研究に専念した。そして、異教の文脈を正確かつ深く知れば知るほど、キリスト教の事実の特異性がより鮮明に見えてきた」と彼と一緒に修道生活していたブラザーが証言している。

- 15 恩寵についての脚注を参照。カトリック神学用語である。天主の助けなしの人間性のみの自然の次元に対して、天主の生命、天主の在り方を指すことばである。人間を完全に超えて、超絶するといういみで、人間性なる自然の次元を超える「超自然」という。